

The Gaskell Society of Japan

Newsletter

No.23 (May 2011)

日本ギaskell協会ニュースレター

東日本大震災によせて

日本ギaskell協会会長 多比羅 眞理子

このたびの東日本大震災の被害にあわれた皆様へ心よりお見舞いを申し上げます。

3月11日午後2時46分、東北を震源とする激しい地震、津波、そして、福島での東京電力原子力発電所事故と、地震発生から3週間を過ぎても、予測しがたい事態が被災地のみならず、関東の各地まで余震とともに不安の波となって日々押し寄せてきております。この災害では現時点で3万人近い方々が亡くなられたり、行方不明と報道され、今回の災害が未曾有の被害を引き起こしたものであることを実感しております。

こうした中で、震源地に近い仙台在住の日本ギaskell協会会員で、現役員の鈴木美津子先生（東北大学大学院）、同じく会員の芳野総子先生（仙台白百合女子大学）がそれぞれご無事に避難され、お怪我もなかったとのご連絡を受け、大変安堵いたしました。

あわせて、震災直後から英国協会会長の Alan Shelston 先生、チェアマンの Elizabeth Williams さん、アメリカの Mary Kuhlman 先生からお見舞いと励ましのメールをいただきました。他にも会員の方々へイギリスやアメリカから同じようにお見舞いの手紙やメールをいただいたと伺いました。いずれの方々も、大災害に襲われた日本人が、この災害を冷静に受け止め、静かにかつ勇気をもって耐える姿に感銘し、賞賛の気持ちを抱いていると語られています。こうした海外から日本のギaskell協会の皆様へのご心配に対して、3月17日英国ギaskell協会の ML から簡単ではありますが御礼をお伝えしました。

今回、地震や津波の大きな災害に加え、人々をさらに混乱の渦に巻き込んだのは、原子力発電所の事故と放射能汚染の問題でしょう。これは、私たちが生活の利便性ばかり追いつめてきたように思えてなりません。被災地の皆さんは自然災害と同時に、原発という文明が作り上げた巨大なモンスターの脅威という二重の苦しみに襲われています。そして、震源地から200キロメートル以上離れた関東地方でも、計画停電や放射能汚染という思いもかけない事態に陥っております。様々、先が見えない不確かな現実のあり様に、私は言いようのない虚無感と不信感に襲われました。

そうした時、手にしたのは、ギaskellの『クランフォード』です。産業の発達したドラムブルから離れた田舎町のクランフォードで、銀行破綻のためミス・マティーが苦難に陥った時、町の人々は、それぞれができる限り援助の手を差し伸べています。人はクランフォードの世界を「理想郷」として容易に手の届かないところへと高く掲げるかもしれませんが、ミス・マティーとクランフォードの人々の互いに信頼し、思いやり、善意に満ちた結びつきこそが、失意のどん底にある人々を救い、そして、浮足立つ人々の気持ちを落ち着かせるのです。私には、クランフォードの世界、そこに住む人々の姿は、現在の日本の、災害に襲われた方々と、被災地ではない地に住む私たちのありようを教えているように思えてなりません。

現在、被災地では少しずつ復興への歩みが始まっています。今までの平穏な生活が送れるようになるまでは、計り知れないほどのエネルギーと多くの時間が必要となることでしょう。でも、その日が必ず来ることを信じて、被災地の皆様に応援いたしましょう。クランフォードの人々がミス・マティーを応援し、支えたように。

(2011年4月1日 記)

The Gaskell Bi-centenary year

Alan Shelston

2010 was the year of Elizabeth Gaskell's bi-centenary which was celebrated by a number of major events. Sadly it was also the year of the deaths of Mrs Rosemary Dabbs, a lady in direct line of descent from Elizabeth Gaskell's daughter Marianne and of Joan Leach, co-founder of the Gaskell Society, and ceaseless worker in its interests. Rosemary Dabbs had always taken an interest in the Society's activities and herself had been active, with her family, in the bi-centenary celebrations, supplying precious materials from the family collection. Joan Leach died on 30 September after a short illness. An inspiration to the Gaskell Society in England, she was well-known to Japanese colleagues both by the help she readily gave to them when they came to Knutsford, and by her own visit to Japan in 2006, an experience she never forgot, and it is impossible to measure the extent to which she will be missed.

Joan died on 30 September 2010, the day following the annual celebrations of Mrs Gaskell's birthday in Knutsford. She had made what can only be described as a triumphant appearance in the town on that day and her death in a room that overlooked the beautiful landscape at Tabley House, a house once known to Gaskell, and now a nursing home, somehow sealed a life given in large part not only to Gaskell but to Joan's home town of Knutsford. Mention of Tabley brings back a personal memory. Some years ago I was invited to speak there about the estate's associations with Elizabeth Gaskell. Apart from an extended chapter in *Mr Harrison's Confessions* these are fairly slight, but I remember Joan's taking me to see the site of the old hall at Tabley, just visible as we peered through the trees. It was a history lesson, as walks in Cheshire with Joan invariably were, and I remember so well both the range of her knowledge, and her affection for an environment that she had known since childhood. Joan's great achievement lay in the Society that she created: a society held together by friendship and by knowledge.

* * * * *

It was both a demanding and a rewarding year: events after all do not organize themselves and it was remarkable to see how it all came together. As well as the society's own programmes there were exhibitions, notably at the Portico and John Rylands University libraries. There were lectures at the Rylands by Jenny Uglow and myself, and events at Plymouth Grove where the work done by Janet Allan and her team might in itself have seemed tribute enough. There were day schools and garden parties, and Gabrielle Drake's dramatization of Gaskell's life. The crowning moment was the ceremony at Westminster Abbey, where Elizabeth Gaskell's name had been inscribed, along with other famous writers, in a memorial window. The event very well



(2010年9月26日にウェストミンスター・アベイで行われた式典後のディナーの様子。前列がリンガードさん、アラン・シェルストン先生ご夫妻、後列が足立万寿子先生、石塚裕子先生、鈴江璋子先生)

attended; a service was conducted by the Dean of Westminster. Mrs Sarah Prince, standing in for her mother, Mrs Dabbs, laid a wreath, and along with Jenny Uglow, paid tribute to her ancestor's achievements. We had the great pleasure of renewing our acquaintance with a number of Japanese friends and colleagues including Professor Akiko Suzue, past president of the Gaskell Society of Japan, who told me of the bi-centenary celebrations of the Gaskell Society of Japan. During the course of the year Elizabeth Gaskell was taken to Chelsea, to Sheffield, to Huddersfield, to Bath, and to Brussels, and to Pescara, where Professor Marroni, our vice-president, devoted a research conference to her work which will result in a collection of essays on the tales and stories (all in English); well, Elizabeth herself was always an enthusiastic traveller. Meanwhile I was urging my publisher to bring out my long-delayed 'Brief Life' before the year ended, and it did indeed appear in November. If as a man I sometimes felt, as Joan's favourite Gaskell quotation puts it, 'so much in the way,' I can only pay tribute to the commitment of Gaskell enthusiasts world wide: I can think of no other similar group that could have achieved so much, both nationally and internationally.

* * * * *

A propitious year then, despite our sadness. And the date of the bi-centenary year reminds us that Elizabeth Gaskell, invariably referred to as a Victorian, was born under the reign of George III in the year when Jane Austen was completing her first published novels, and grew up during the period of their publication. The connection is to the point since our summer conference this year is to be held at Winchester, a city with many Jane Austen associations, and in whose cathedral she lies buried. The subject of the conference is 'Elizabeth Gaskell and women writers', and Jane Austen is just one of the writers who will come under discussion. So no sooner had we said good-bye to 2010 that we realized that 2011 would need to be organized. Those familiar with Elizabeth Gaskell's correspondence will know that her activities were tireless. So are the members of our societies. Who would have it otherwise?

第 22 回例会レポート

日 時：2010 年 6 月 5 日（土曜日）
午後 2 時より

会 場：日本大学法学部本館 2 階第一会議室

総合司会：長浜麻里子（東京農業大学非常勤講師）

開会の辞：日本ギaskell協会会長 多比羅眞理子
（実践女子大学非常勤講師）

研究発表：司会 島 高行（実践女子大学教授）

1. 『シルヴィアの恋人たち』における
「循環」の構造

齊木愛子（熊本大学大学院生）

2. 「ギaskell作品における母親の表象——『ルース』を中心に」

小泉朝子（早稲田大学非常勤講師）

講演：「研究の方法、研究の意義を求めつつ——『嵐が丘』、『メアリ・バートン』、『ハムレット』を中心に」

司会 松村豊子（江戸川大学教授）

講師 東郷秀光（慶應義塾大学名誉教授）

閉会の辞：日本ギaskell協会副会長 大野龍浩（熊本大学教授）



本例会は 2010 年 6 月 5 日（土）、日本ギaskell協会の新会長多比羅眞理子氏の挨拶により開会した。続いて島高行氏の司会により齊木愛子氏および小泉朝子氏による研究発表が行われた。

研究発表

1. 『シルヴィアの恋人たち』における「循環」の構造

齊木氏はシルヴィアが水のイメージを纏い続けるヒロインであることに注目し、シルヴィアの物語には水に関連する「循環」の構造が与えられていると論じた。そして登場人物の行動や繰り返される悲劇にも同じように循環構造があることを図表で示しながら、この作品には全体に水の流れが見られると結んだ。

2. 「ギヤスケル作品における母親の表象——『ルース』を中心に」

小泉氏はヴィクトリア朝中期の風俗画に描かれた“fallen woman”を検討することで、『ルース』が社会小説としていかに意欲的な作品であるかを論証した。小泉氏は母と子、この場合「道を踏み外した女性」と私生児をめぐる表象や記述に言及され、『ルース』が当時の道德規範から二重に逸脱した展開をもつ作品であることを指摘された。

研究発表にはそれぞれ活発な質疑応答が交わされ、10分の休憩を挟んだ後、松村豊子氏の司会により東郷秀光氏の講演が行われた。

講演：「研究の方法、研究の意義を求めつつ——『嵐が丘』、『メアリ・バートン』、『ハムレット』を中心に」

東郷氏はこれまでの研究生活を振り返り、上記の3作品における主人公の描かれ方を具体的に検討しながら、豊かな文学の世界を読み解くための研究の方法と意義について語られた。東郷氏の語り口はいたって平明で穏やかでありながら、主人公および作品への深い理解と愛情に溢れ、ひとつの文学作品がどういう意味で古典となるかについて具体的に述べられた。そして作品への愛着と繰り返し読むという行為が研究の礎であること、また研究方法というテーマについては「問いかけ」と「アナクロニズム」という立場を示された。「研究方法とは文学作品に何を問うかということ」、「豊かな問いかけが豊かな答えを引き出してくれるのではないか」、「英文学研究で日本は分家ではないかと恐れなくてよい、広い意味でのアナクロニズムで、日本的な発想で問いかけ、英文学がどう答えてくれるか考え、主張してよいと思う」と語られた。会場は満場の拍手。本講演の内容は『ギヤスケル論集』第20号（2010年8月10日）に掲載されたので、未読の方はご一読いただきたい。

この日は東郷氏の旧知の方々も集われ盛況であった。例会は新副会長大野龍浩氏の閉会の辞により終了し、続いて懇親会が行われた。

（長浜麻里子）

エリザベス・ギヤスケル生誕200年記念第22回大会レポート

日 時：2010年10月3日（日）

午前10時より

会 場：実践女子大学香雪記念館大教室

総合司会：田中孝信（大阪市立大学大学院教授）

開会の辞：日本ギヤスケル協会会長 多比羅真理子
（実践女子大学非常勤講師）

研究発表：司会 諸坂成利（日本大学教授）

1. 「おじさんの遺産——*North and South*におけるおじの不在」

林美佐（青山学院大学大学院生）

2. 特別研究発表

「＜癒し＞の表象とジェンダー・ロールの変遷——エリザベス・ギヤスケルの『ルース』から＜新しい女＞小説へ」

市川千恵子（釧路公立大学准教授）

総 会：司会 日本ギヤスケル協会事務局長 諸坂成利（日本大学教授）



シンポジウム：「エリザベス・ギaskellと同時代の女性作家たち」

コーディネーター 直野裕子（甲南女子大学名誉教授）

講師 廣野由美子（京都大学大学院教授）

講師 芦澤久江（静岡英和学院大学短期大学部教授）

講師 松本三枝子（愛知県立大学教授）

講演：「ギaskell文学のトポス —— 廃屋のある風景」

司会 鈴木美津子（東北大学大学院教授）

講師 鈴江璋子（実践女子大学名誉教授）

閉会の辞：日本ギaskell協会副会長 大野龍浩（熊本大学教授）

まだ今夏の暑さが残る10月3日（日）、エリザベス・ギaskellの生誕200年を記念する第22回大会が、日本ギaskell協会生誕の地である実践女子大学で開催され、80名余りが集った。その記念すべき大会に合わせて、協会員の知的総力を結集した論文集が上梓され、また9月27日（月）からは同大学で、ギaskell全集・翻訳書・内外の研究書に加え、19世紀のドレスや帽子を展示した記念展が開催されており、当日はそうした一連の祝い事の有終の美を飾るに相応しい充実した一日となった。以下プログラムに沿って、大会を振り返ってみたい。

まず総合司会を仰せつかった田中のもと、大会直前に亡くなられた、ギaskell協会とは縁の深いジョアン・リーチ女史に1分間の黙祷を捧げた後、多比羅会長の開会の辞で大会は幕を開けた。そしていよいよ研究発表、シンポジウム、講演と続くのだが、それらの知的刺激に富む内容に関しては、司会やコーディネーターの役を担われた諸坂氏、直野氏、鈴木氏にご報告いただいた。

研究発表

「おじさんの遺産 —— *North and South* におけるおじの不在」

林氏は、19世紀の多くの小説に「おじ」が登場するのに、なぜギaskellの作品には登場しないのかという大変興味深いテーマを、『ジェーン・エア』（1847）や『白衣の女』（1860）との比較で『北と南』（1855）を題材にして論じた。氏は現在、博士論文執筆中であり、それが完成すれば、より広範囲の射程からギaskell文学における「おじの不在」が明らかにされるものと期待される。

特別研究発表

「〈癒し〉の表象とジェンダー・ロールの変遷 — エリザベス・ギaskellの『ルース』から〈新しい女〉小説へ —」

ナイティンゲールの近代看護精神や『ルース』（1853）における看護の表象を皮切りに、〈癒し〉の観点からその系譜を辿る市川氏の丹念な作業は、女性医師の誕生と文学表象、さらには世紀末から20世紀にかけての〈新しい女〉の登場する小説にまで及び、ジェンダーに係わるこの問題の広がりや深みが説得力をもって示された。

シンポジウム：「エリザベス・ギaskellと同時代の女性作家たち」

このシンポジウムは、ギaskellがヴィクトリア朝の社会を、どのように生き、描いたかについて、交流のあった同時代の女性作家と比較して論じ、ギaskell文学の特色をより明らかにすることを目的としたものである。

1. ハリエット・マーティノーとギaskell — 社会小説と女のユートピア

ギaskellは『メアリ・バートン』（1848）の序で、Political Economy について全く知らないと言っているが、マーティノーの『経済学例解』（1832-34）を意識していた。マーティノーはこのシリーズの第7巻『マンチェスター・ストライキ』で、マンチェスターの労働者問題を扱っているのだが、二人の女性作家の立場は対照的に解釈されてきた。しかし、『マンチェスター・ストライキ』と『メアリ・バートン』において、労使対立、ストライキ、貧困等に対する両作家の考

え方には多くの共通性が指摘できる。さらに、マーティノーが『時の人』(1841)で描く、人種を超えた女性たちの理想郷は、ギヤスケルの『クランフォード』(1851-53)と同様に、ヴィクトリア朝社会とは対極にある女のユートピアである。社会小説を契機として、対照的に捉えられてきた女性作家の絆と伝統を検証した。

2. シャーロット・ブロンテとギヤスケル——作家、女性、友情

『シャーロット・ブロンテの生涯』(1857)においてシャーロットは親孝行で、女性らしく、控えめな女性として描かれているが、これはまさしくギヤスケルの価値観を投影したものであった。ギヤスケルはこのようにシャーロットを理想的な女性として描くために、手紙を切り貼りしたり都合の悪いことは削除したりして、徹底的な情報操作を行った。その結果ギヤスケルの意図したとおり、シャーロットは女性の模範として崇拜され、伝記は長い間女子教育にも大いに役立ってきた。しかし伝記に描かれているのは、シャーロットの個人的な経験を超えた、当時の中流階級女性が蒙っていた悲劇の体現でもあった。このように考えると、『シャーロット・ブロンテの生涯』もまた『メアリ・バートン』や『ルース』と並んで社会小説として読むことができる、と結論づけた。

3. ジョージ・エリオットとギヤスケル——道徳的姿勢をめぐる

ギヤスケルの『ルース』とエリオットの『アダム・ビード』(1859)を取り上げて、「堕ちた女」の扱い方を中心に、両作家の道徳的姿勢や文学性の特色を比較した。ルースとヘティは、堕ちてゆく経路や状況に関しては共通点が認められるが、前者が母となることによって再生するのに対して、後者は母性の決定的な欠如により破滅するという点で、大きく隔たっている。また、ルースが自己滅却的な女性として美化されているのに対し、ヘティの場合は自己中心的な内面が分析されていて、人物造形の方法においても異なる。しかし、G・H・ルイスとの非法な結婚によって、自ら「堕ちた女」として非難され自己弁明に迫られていたエリオットと、「堕ちた女」を弁護することによって社会的立場が揺るがされる危険に身を晒していたギヤスケルは、別の方向から同じ題材に果敢に取り組み、シンパシーの問題を追求したとも言え、そこに両作家の接点が見出されると結論づけた。

講演：「ギヤスケル文学のトポス——廃屋のある風景」

「廃屋のある風景」をギヤスケル文学の重要なトポスの一つとして捉え、『ルース』、「リビー・マーシュの三つの祭日」(1847)、「ヘッペンハイムの六週間」(1862)を、ときにトマス・ハーディの『ダーバーヴィル家のテス』(1891)と比較検討しながら、縦横無尽に論じられた魅力的で味わい深い講演であった。なかでもひととき印象的だったのは、ルースはギリシア神話の豊穡の女神ペルセフォネを思わせるというフェリシア・ボナパルトの解釈を紹介しながら、実はルースはむしろ恋愛の神エロースに愛された美少女プシューケーを想起させるのではないかという斬新で刺激的な指摘である。パワーポイントの資料を巧みに駆使された鈴江氏の講演は、朗々としてときに劇的な引用文の朗読と深い文学的な学識と相俟って、聴衆を魅了した。

総会は、事務局長の諸坂氏の司会のもと、研究発表の直後に開かれ、平成21年度会計・平成22年度予算、『ギヤスケル論集』第20号、例会・大会およびNLに関する平成23年度行事予定等が報告された。また、前日の役員会で審議された、年1回開催にするかどうかも含めた、今後の例会・大会のあり方について諮られた。会員の意見を広く聞いた上で引き続き役員会で話し合うこととなった。

講演の後、実践女子大学文学部英文科主任の難波雅紀教授より開催校挨拶があり、続いて閉会の辞が、大野副会長から研究発表・シンポジウム・講演への「講評」、そして大会開催に尽力して下さった方々への御礼という形であった。さらに大野氏から今大会を記念して出席者全員の写真撮影が提案され、笑顔に満ちた集合写真が撮られた。全てがプログラムの時間通りに進行するという、その点でも実に引き締まった大会になったことを付記しておく。これも関係者各位のご努力の賜物と感謝する次第である。

大会終了後は会場を移して、論文集の発行、ギヤスケル展、そしてギヤスケル生誕200年を祝う祝賀会を兼ねた懇親会が開催された。私自身は参加できなかったのですが、多比羅氏にご報告いただいたところによれば、参加者は34名。諸坂氏の司会、慶応義塾大学名誉教授であられる東郷秀光氏の乾杯の音頭で始まった会は、銀座のコルドン・ブルーからのケイタリングによる美しく豪華な料理に舌鼓を打ちつつ、大会の余韻に浸りながら、和やかな雰囲気の中、盛会のうちに閉会となったとのことである。

(田中孝信)

たかが書式、されど書式——「生誕 200 年記念論文集」続編集後記

大野 龍浩

編集をしてもっとも戸惑ったことのひとつは、各執筆者の書式がまちまちということだった。執筆要項には「書式の詳細（送りがな、算用数字・漢数字の使い分け、記号の使用等）については、『共同通信社記者ハンドブック新聞用字用語集』（第 10 版）にしたがう。論文中の英文部分に関しては、*MLA Handbook for Writers of Research Papers*, 6th ed. に準拠する」と記してあるが、30 数名の投稿者のうちこれを守られたかたは何人いらっしゃったのだろうか。

執筆要項の原案を作られたかたも、編集委員各位も、投稿者の大半も、「論文集なのだから全体の統一を図るべき」という立場であられたように思う。至極もっともな考えだ。しかしながら、これまでの経験から、こうなることはある程度予測がついた。だから、各人のやり方を尊重するのも一興と思ったし、本務をかかえている以上、そのほうが現実的な対処の仕方だった（編集委員の中には、仕事を分担してはどうかと提案してくださるかたもいたが、分担したらかえって収拾がつかなくなる気がした。時間的制約があり、編集委員が地理的に離れていて容易に集まらないという事情もあるので、書式の統一は一人でするほうが効率的に思えた）。

しかしながら、注のつけ方一つにしても、「p. 123」「一二三頁」「pp. 123-124」「123-24」とまちまち（正解は *MLA Handbook*, 7th ed. 6.3 を参照してください）。算用数字は、「二〇〇年」か「二百年」か（使い分けの詳細な説明が「ハンドブック」11 版、565-69 にある）。書名の書き方は、『メアリ・パートン』か「メアリ・パートン」か（同書によると、「基本的に「」で、『』は「」のなかで使う」とある [389, 514]）。出版情報の記載は、「大阪：大阪教育図書、二〇一〇」か「(大阪教育図書、二〇一〇)」か（前者は MLA 式。後者は慣習か）。こういうことは、投稿者一人一人が留意すべきことで、編集者にチェックを任せられるのは荷が重い。また、英語論文用の規則である MLA 様式を日本語論文に適用することや、「ハンドブック」が日本語論文執筆の規則集としてどれだけの権威があるのかについて、疑問を抱かれたかたもいらしたようだ（そういうかたに対しては、どう返答していいのかわからない）。

したがって、せいぜいわたしにできたことは、参照頁数の入れ方と引用文献の書き方を MLA 様式に合わせたことくらいで、ほとんどは各執筆者の自主性に任せた。けれども、初校に入れた朱が再校で反映されても、三校では無視されていることもあった。そのような場合は、それが執筆者の意志と思い、さらに修正することはしなかった。書式は面倒で、論考の質にはほとんど関係がない。けれども、同時にそれは論者の見識を表す。間違えると、世界中の人文系研究者が守っている標準書式の一つを知らないことになるからだ。英語論文にしろ、日本語論文にしろ、書式に不明な点が出てきたら、できるだけ権威のある規則集で確認する習慣をつけたいものだ。そうしないと、そういうわたしたちから教わる学生たちも、標準的な形式上の原則を知らないまま、文章を書いていくことになる。

ギヤスケル 200 回目の誕生日とリーチさん

足立万寿子

2010 年 9 月 29 日午前 11 時、ナッツフォードのユニテリアン教会ブルック・ストリート・チャペルの一階は満席だった。記念講演開始直前、ジョアン・リーチさんがご子息、看護師さんに伴われ、車椅子で入場された。出席者の拍手が起こる。私は思わずリーチさんに近づく。“Masuko!”——低いお声。握ってくださった手は、ふんわりと柔らかい。英国ギヤスケル協会議長エリザベス・ウィリアムズさんの記念講演「エリザベス・ギヤスケルの生涯と作品」が始まる。200 年前のこの日、ロンドンのチェルシーで生まれ、1 歳 1 か月で母親を亡くし、ここナッツフォードに住むラム伯母に引き取られ、この教会に通った幼少時代のギヤスケルを振り返ったあと、妻、母、主婦としての、また作家としてのギヤスケルの人生に話が進む。セシルの「家庭的で、知的でなく、涙もろく……」や、ディケンズの「ああ、恐ろしいギヤスケル夫人、俺がギヤスケル氏ならぶん殴ってやるぞ!」という引用が出ると、そこここから笑い声が上がる。『メア



リ・バートン』に関連して、「奥さん、餓死していく子どもを見たことがおありでやんすか」と訴える労働者の悲痛な声や、猩紅熱に何とか耐えた息子に滋養物を与えよと言う医者にジョン・バートンが洩らす「何と人を馬鹿にした」という嘆息に触れられると、出席者たちの目も潤む。信頼する夫から大きな自由を認められ、家族や世の人々、中でも恵まれない人々に熱い愛情を注ぎながら、自己実現も果たしたギaskellの姿が出席者たちの胸のうちに再び甦った講演だった。

リーチさんの悲報を聞いたのは、その翌日のことだった。昨日、ウィリアムズさんが講演を始められる前に、25年前のこの日、リーチさんが英国ギaskell協会を設立され、ギaskellだけでなく、

ギaskellの育ったチェシャーのナッツフォードがギaskell・カントリーとして広く知られるようになったこと、それはひとえにリーチさんの驚異的な献身のお蔭であること、その頂点ともいえる、先週の土曜日の9月25日、ウェストミンスター寺院の「ポエッツ・コーナー」で行われたギaskellの記念碑献納礼拝では、参列したギaskell協会員全員が闘病中のリーチさんを思っていたことを話され、ギaskellとともに「素晴らしい女性」のリーチさんに深く熱い感謝の念を示された。車椅子の席のリーチさんは、柔和な笑みを返されていたのに……。

ギaskellをこよなく愛され、日本のギaskell・ファンにも助けの手を惜しまれなかったリーチさん。リーチさんが教会堂を出ていかれるとき、全員が立ち上がり、拍手で見送った。堂内に満ちたその響きがまだ私の耳に残っている。もっともっと生きていただきたかったリーチさんも、私たちの胸の中に消えることなく残り続けることだろう。

(写真は、2010年9月26日にウェストミンスター・アベイで行われた式典後のディナーの様子。
前列が鈴江先生、シャトック先生、ストーンマン先生、後列が関田先生、石塚先生、足立先生)

エリザベス・ギaskell生誕 200 年記念展報告

小泉朝子

昨年の9月27日から10月3日にかけて実践女子大学香雪記念館で開催されたエリザベス・ギaskell生誕 200 年記念展は、多くの方のご支援ご尽力で無事、成功裡に終了した。貴重な書籍や資料をお貸しくださった会員の皆様、そして記念展の準備に携わってくださった皆様に、この場を借りて心より御礼を申し上げたい。

今回の記念展では、1850年代の全集や小説、1890年代以降に出版された挿絵本、日本で翻訳された小説などを展示する「書籍部門」と、ギaskellが生きた時代のドレスや古地図、雑誌などの一次資料を展示して世相を読み解く「文化史部門」の二つに分けて様々な資料をお見せすることになったわけだが、何と言っても目玉だったのは、文化学園服飾博物館からお借りしたドレスと帽子だろう。

このドレスの搬入には、長浜麻里子氏が早朝から付き添ってくださった。午後には博物館の学芸員二人の手で組み立てと飾り付けが始まったが、180年以上も前のドレスが劣化しないよう、細心の注意が払われての作業だった。このお二人以外には触れることも許されなかったドレスだが、書籍展示の準備に忙しかった実行委員がその手を止めて魅入ってしまうほど美しかった。明度を制限された薄暗い照明の下で見ても、凝った刺繍や少々重たそうな光沢のある生地、形良く並んだ沢山のボタンは美麗で、当時の婦人の暮らしぶりをしのばせる。ドレスに合わせたボンネットも、考え抜かれた色合いと凝った作りで溜息が出るほど美しかったが、これもやはり、重量感を感じさせた。『クランフォード』のご婦人たちは肩凝りに悩まされたに違いない。見る者に当時の雰囲気をもひと目で伝える、その圧倒的な説得力は来館者にも強く伝わっていた。



ドレスの搬入日は準備のクライマックスでもあり、すべての書籍や資料を

陳列しようと、実行委員総出で夜まで働いた。エディション・シナプスの金子氏もお忙しい中、手伝いに駆けつけてくださった。書籍の展示方法については香雪記念館の司書の方からご意見をいただき、最終的な確認を行ったが、なかなかの力仕事だった。また、展示品の説明に必要なキャプションは、遠藤花子氏が実に器用に美しく作成してくださった。記念展準備のノウハウに詳しい遠藤氏からは、ボード類作成についても手ほどきをしていただいた。あの酷暑の中での、のりとカッターを駆使する作業は、彼女の手際良さと的確な指示がなかったら、さぞや大変なものになったことだろう。記念展が開催されるまでには、いくつもの工程があることを知る、良い機会だった。

今回の展示を見た方々に、ギaskellという作家と作品、そしてその時代の空気が少しでも伝わったならば、実行委員の一員としてこれ以上の幸せはない。

湖水地方とヴィクトリア朝の作家たち

市川千恵子

時の経つのは早いもので、イギリスでの研修から帰国後、既に半年が過ぎた。ちょうどこの原稿を執筆中の春の訪れを感じ始める時期になると、イギリスの南部から中部にかけて水仙の開花が伝えられる。国語教育のなかで詩が重視されているお国柄のせいか、この季節に小学校低学年の子供たちが暗唱させられるのが、Wordsworth の “The Daffodils” (1804) である。彼が生涯を過ごした湖水地方はロマン派詩人だけでなく、ヴィクトリア朝の作家にも愛された場所であった。

研修が終わる直前の8月の初旬、リサーチのために The National Library of Scotland のあるエディンバラへ向かう途中、湖水地方に立ち寄った。実に19年ぶりのことである。当時の私は湖水地方といえばロマン派詩人の聖地ということと、Peter Rabbit の作者 Beatrix Potter のナショナル・トラスト運動の場所といった程度の知識しか持ち合わせていなかった。今回はまず Wordsworth が住んだ二つの家を訪問してから、湖水地方におけるヴィクトリア朝文学の名残を辿ることにした。

Gaskell にとっても湖水地方は作家としてのキャリアのうえで、重要な場所の一つであった。1850年、家族と Silverdale の Gibraltar Farm (この農場は現存する) でひと夏を過ごした時に、*Ruth* の24章(ヒロインが Bellingham と対峙する砂浜での自然描写)の着想を得ている。また、その8月には Sir James Kay Shuttleworth の別邸 Briery Close (その後ホテルとなり、現在は個人の所有になっている) に招待され、Charlotte Brontë と劇的な出会いをしているのだ(書簡番号 75-78 を参照)。

Harriet Martineau も1846年に Ambleside に The Knoll と呼ばれる住居を構え、当時の女性としては稀有な経済的かつ精神的に自立した生活を送った。広い道路からみえるブルー・ブランクが張られた建物は、彼女が開校した青少年向けの学校の跡地である。今では近代的な建物に変わっているが、現在も地元の青年のための施設として使用されているそうだ。そこから少し奥に入るとかつての住まいがあるのだが、私有地のため遠くから眺めるしかなかった。そのたたずまいは彼女の凛とした生き様を映し出しているかのようであった。

湖水地方ツアーの最後に、John Ruskin がその晩年を過ごした Brantwood (Coniston Water の東側) に足を運んでみた。併設されたオープン・カフェで休憩をとると、そこからは言葉では形容することのできないほど、美しい湖と自然が眼前にひろがっていた。Ruskin が終の棲家をこの地に選んだことも理解できるように思えてきた。2010年は *Modern Painters* 完成の150周年でもあったのだ。最後に、一日ハンドルを握り、湖水地方を案内してくださった Michael Shattock 氏に心から感謝を申し上げる。

事務局報告（平成22年度）

1. 役員会

平成22年度日本ギaskell協会第1回役員会

日時：平成22年6月5日（土）午後3時、会場：日本大学法学部本館2階第1会議室、1. 入退会の件、入会者：小田夕香里（福井工業大学専任講師）、遠藤花子（実践女子大学助教）退会者：香山はるの、川満昇、平田トミ子（ご逝去）2. 会員異動：西垣佐理（近畿大学農学部特任講師）所属変更、関口章子（北里大学）住所表記変更、3. 役員組織と役割分担、日本ギaskell協会第12期役員；会長：多比羅真理子、副会長：大野龍浩、事務局長：諸坂成利、幹事（第11期着任・第12期再任）：阿部美恵、石塚裕子、熊倉朗子、廣野由美子、松村豊子、矢次綾（第12期着任）：江澤美月、大島一彦、大嶋浩、木村晶子、小泉朝子、鈴木美津子、田中孝信、長浜麻里子、『ギaskell論集』編集委員会委員長：松村豊子、論文審査委員：阿部美恵、大野龍浩、木村晶子、鈴木美津子、多比羅真理子、廣野由美子、22年度大会運営委員長：多比羅真理子、庶務委員：熊倉朗子、小泉朝子、長浜麻里子、広報委員：（Newsletter担当）矢次綾、江澤美月、（ホームページ運営）熊倉朗子、（各種MLの管理）宮丸裕二、会計監査：金丸千雪、斎藤南子、『エリザベス・ギaskell生誕200年記念論文集』編集委員長：大野龍浩、『エリザベス・ギaskell生誕200年記念展』委員：鈴江璋子、東郷秀光、大野龍浩、同実行委員：熊倉朗子、小泉朝子、島高行、多比羅真理子、長浜麻里子、諸坂成利、3. 『ギaskell論集』第20号について、松村委員長より経過報告があり、その後編集委員1名追加の要望があったが、「編集実務委員」を1名加え、その人選は執行部で検討することが承認された。4. 第22回例会・大会について、例会手順について確認がなされた。5. ギaskell生誕200年記念行事について、記念論文集編集委員会・大野委員長より、最終的に31本が採用されたこと、出版はギaskellの誕生日（9月29日）を目指すこと、その他経過報告がなされた。また多比羅会長・諸坂事務局長より、今回の記念論文集出版は前会長鈴江璋子氏の発案によるものであり、その実行に際し金100万円の援助があったことが報告された。また「エリザベス・ギaskell生誕200年記念展」実行委員会・多比羅委員長より経過報告があり、開催期間は平成22年9月27日～10月3日（大会開催日）とし、現在準備を進めていること、また諸坂事務局長より展示予定のドレスを文化学園服飾博物館より貸借するにあたり、ドレスは美術品扱いとなるため会場までの搬入作業費がかかる旨報告がなされた。また今回会場校となる実践女子大学より5万円の補助金が支給されること、これと併せ協会22年度予算より20万円を展示会実施費に割り当てたいとの提案がなされ、また例年大会用のポスター制作費を今年度は展示会に充当したいとの提案がなされ、それぞれ承認された。6. 平成23年度行事について、第23回例会は、平成23年6月4日、会場は日本大学法学部、第23回大会については10月2日に開催する案が出され、承認された。またシンポジウムについては、宇田朋子氏等を講師にブロンテを含む4人の作家の「書簡集に関する」シンポジウム提案があり、承認された。未定事項等は次回役員会において決定することが承認された。7. 事務局報告、広報：Newsletter報告、諸坂事務局長より経過報告がなされた。また例会・大会のレポート担当に関しては、現行通り総合司会担当者がレポートも兼任する旨承認がなされた。8. その他、学生会員（ドクターを含む院生）に関しては1000円に変更することが決定された。

平成22年度日本ギaskell協会第2回役員会

日時：10月2日（土）午後3時、会場：日本大学法学部本館2階第2会議室、1. 入退会の件、退会：近藤泰子、2. 諸坂事務局長より平成21年度会計報告があり、承認された。3. 『ギaskell論集第20号』について、松村委員長より、投稿が4本あり、審査の結果2本を採用したとの経過報告があった。また投稿締切を4月末日、審査締切を6月10日にする案が出され、審議の結果承認された。4. 第22回大会について、研究発表の司会は担当者怪我のため、事務局長に変更、英国ギaskell協会のJoan Leachさんのご逝去を悼み、大会に先立ち1分間の黙祷を行うことが承認された。5. ギaskell生誕200年記念行事について、大野委員長より記念論文集の経過および完成報告があった。またギaskell展については多比羅委員長より経過報告があり、Westminsterでの式典の様態を報道した新聞、写真も展示されている件、また展覧会準備においては、エディション・シナプスの金子貴彦氏が正式の委員ではないにもかかわらず献身的にお手伝いいただいたこと、また10月1日現在で110名の来場者あったことが報告された。6. 平成23年度予定について、例会の位置づけを見直し、例会を大会と一本化する意見が出されたが、これは継続審議となった。またNewsletter23号について各執筆者案が出され、さらに大会報告を総合司会が全部執筆するのは、負担が大きいため、今回から各セクションの司会者が発表者の発表内容をまとめ、それを総合司会がまとめる形とする案が出され、承認された。

PDF 版につき省略致しました。

日本ギャスケル協会 第23回例会のご案内

日 時：2011年6月4日（土）

会 場：日本大学 法学部 本館2階第1会議室

内 容：開会 14:00

研究発表 14:05～

1. 「*Ruth* に見る意識が直接あたえてくれるもの—ヒロイン・ルースを例にして—」

大前義幸（日本大学大学院博士後期課程）

2. 「『クランフォード』における女性の自立について」

前原由紀（慶應湘南藤沢中・高等部非常勤講師）

講演 15:45～

「19世紀 ファッションの社会に生きた人々—エリザベス・ギャスケルの描写をめぐって—」

能澤慧子（東京家政大学教授）

閉会 17:00

会場を移して懇親会 17:30～

会員の皆様には会場、プログラムなどの詳細をこのニューズレターに同封しております。会員外の方も
お誘いあわせの上、是非ご参加ください。

* * * * *

第23回大会は10月2日（日）、江戸川大学にて開催されます。シンポジウムは、宇田朋子氏（聖徳大学短期大学部准教授）がコーディネーターとなり、「書簡・文学」（仮題）というテーマに基づき準備を進めております。パネリストは、出淵敬子氏（日本女子大学名誉教授）、大田美和氏（中央大学教授）、江澤美月氏（専修大学非常勤講師）です。詳細につきましては、追ってお知らせいたします。

編集後記

- ・ギャスケル生誕200年を記念する様々な行事が2010年に行われたことを受け、今号はアラン・シェルストン先生をはじめとして多くの方々に寄稿していただくことができました。大野龍浩先生からは例会、大会、ギャスケル展の写真を、閑田朋子先生からはウェストミンスター・アベイでの記念式典後のディナーの様子を撮影した写真をご提供いただきました。いろいろとお心遣いをいただきました多比羅真理子会長、諸坂成利事務局長、一緒にご担当いただいた江澤美月先生にもお礼を申し上げます。みなさま、たいへんありがとうございました。
- ・ジョアン・リーチさんがお亡くなりになったのも、2010年の忘れられない出来事となりました。私は残念ながらリーチさんに一度もお会いしたことがありません。その温かなお人柄については常々うかがっていましたが、一度お会いしてお話したかったという思いが、シェルストン先生と足立万寿子先生の記事を読んですます強くなりました。
- ・私が担当を務めるのも今号が最後となりました。無事

に発行できてほっとしている今も頭を離れないのは、3月11日に発生した大震災のことです。会員のみなさまのご無事を嬉しく思う一方で、命を失われた方々やそのご親族、その後も不自由で不安な生活を強いられている方々のことを思うとやりきれない気持ちです。状況が今より少しでも良くなることを心の底からお祈りすると同時に、自分に何ができるのかを考え続けたいと思います。

（編集 矢次 綾）

発 行：日本ギャスケル協会

〒101-8375

東京都千代田区三崎町2-3-1

日本大学法学部 諸坂成利研究室内

日本ギャスケル協会事務局

03-5275-8730

URL: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/gaskell/>

e-mail: smorosak@law.nihon-u.ac.jp

発行日：2011年5月1日